

ト オツシヤイマシタ。

オジーサンワ キニ ノボツテ、ハイオ マキマシタ。スルト、カレキニ ハナガ サイテ、イチドニ ハナザカリニ ナリマシタ。

トノサマワ、

「コレワ フシギ ダ。キレー ダ。キレー ダ。」

ト オホメニ ナツテ、ゴホービオ タクサン クダサイマシタ。

トナリノ オジーサンワ、ノコツテ イタ ハイオ カキアツメテ、

カレキニ ノボツテ、トノサマノ オカエリオ マツテ イマシタ。

ソコニ、トノサマガ オトーリニ ナツテ、

「モー イチド、ハナオ サカセテ ゴラン。」

ト オツシヤイマシタ。

オジーサンワ、ハイオ ツカンド マキマシタ。イクラ マイテモ、

ハナワ サキマセン。シマイニ、ハイガ、トノサマノ メヤ クチニ

ハイリマシタ。

トノサマワ、

「コレワ ニセモノ ダ。ワルイ ヤツ ダ。」

ト オツシヤイマシタ。

オジーサンワ、トートー シバラレテ シマイマシタ。

二十二 ユメ

ユーベ、ネドコニ ハイツテカラ カンガエマシタ。

ワタクシニワ、オトーサンモ アリマス。オジーサンモ アリマス。

ケレドモ、オジーサンノ オトーサンワ、オイデニ ナリマセン。

イマワ、オイデニ タラナイガ、マエニワ、オイデニ ナツタニ

チガイ アリマセン。ソレワ、ドンナ オカタデ アツタ デシヨ。

コンナ コトオ カンガエテ イル ウチニ、イツノマニカ ネム。

ツテ シマイマシタ。

ユメニ、ヒロイ ノハラオ ミマシタ。

ハナガ イチメンニ サイテ、チョーチョーガ トンデ イマシタ。  
ソコエ、ヒトリノ オジーサンガ デテ キマシタ。ミルト、ワタ  
クシノ オジーサンニ ヨク ニタ カタ デシタ。  
ワタクシワ オモワズ、

「オジーサン。」

ト イーラスト、ソノ カタワ、

「ワタシワ、オマエノ オジーサンノ オトーサン ダヨ。」

ト イツテ、ニコニコ ナサイマシタ。

二十三 ツクエト コシカケ

センセーガ、コンナ オハナシオ ナサイマシタ。

「ミナサンノ ツカッテ イル ツクエモ コシカケモ、ナガイ ア

イダ ハタライテ イマス。」

ニネンセーモ、コレデ ベンキョーオ シマシタ。サンネンセーモ、

コレデ ベンキョーオ シマシタ。

ヨネンノ ヒトモ、ゴネンノ ヒトモ、ロクネンノ ヒトモ、ソノ

マエノ ヒトモ、コレオ ツカイマシタ。ミナサンノ ンマレル

マエカラ、コノ ツクエモ コシカケモ アッタノ デス。」

ココマデ オハナシオ キーダ トキ、フト、ワタクシワ、ユーベ

ノ ユメノ コトオ オモイダシマシタ。

センセトワ、ツズケテ オツシャイマシタ。

「コンド、ミナサンガ ニネンセーニ ナツタラ、アタラシー イチ

ネンセーガ ハイッテ キテ、マタ ツカイマス。コノ ツクエヤ

コシカケオ、ノカワイガッテ ヤリマショーネ。」

二十四 ウグイス

「イサムサン、モー シチジ スギマシタ。ハヤク オキナイト、ガ

ッコーガ オクレマスヨ。」

ト、ネーサンガ イーマシタ。

「ハイ。」

ト、イサムサンワ ヘンジオ シマシタガ、マタ ネテ シマイマシタ。

「イサムサン、イサムサン、ハヤク オキナイト、ガツコーガ オク、レマスヨ。」

ネーサンワ、マエヨリモ オーキナ コエデ イーマシタ。

イサムサンワ、スグ オキヨート オモイマシタ。ケレドモ、ネムクテ ネムクテ タマリマセン。

ソノトキ、ニワノ ホーデ、

「ホー ホケキヨ。」

ト、ナク コエガ シマシタ。

ネーサンワ、

「アラ、ウグイスヨ。」

ト イツテ、ショージノ ガラスカラ ソトオ ミナガラ、

「モー ハル デス。イサムサンモ、ジキ ニネンセーデワ アリマセンカ。サー、ハヤク オーキナサイヨ。」

ト イーマシタ。

イサムサンワ トビオキマシタ。

ニワデワ マタ ウグイスガ、

「ホー ホケキヨ。」

ト ナキマシタ。

二十五 ツクシ

ポカポカト

アツタカイ ヒニ、

ツクシノ ボーヤワ

メガ サメタ。

ツクシ ダレノ コ、  
スギナノ コ。

ドテノ ツチ

ソツト アゲテ、

ツクシノ ボーヤガ

ノゾイタラ、

ソトワ ソヨソヨ

ハルノ カゼ。

二十六 キシヤ

「ゴ！」

ト、 トークノ ホーデ オトガ シマシタ。

「キシヤ ダ。 マサチャン、 ミニ イコー！」

ト、 ニーサンガ イーマシタ。

ボクタチワ、 ハタケノ ナカノ ミチオ ハシツテ、 センロノ ホー

ーエ イキマシタ。

キシヤワ グングン オーキク ナツテ、 コツチエ キマス。

「カモツレツシヤ ダ。 ナガイ、 ナガイ！」

ト、 ニーサンガ イーマシタ。

「シユツ、 シユツ、 シユツ、 シユツ。」

ト、 キカンシヤガ オーキナ オトオ タテテ キマシタ。

「イクツ アルカ、 カゾエテ ミヨ！」

ト、 ニーサンガ イーマシタ。

クロイ ハコノ クマガ、 アトカラ アトカラ ヤツテ キマス。

「イチ、 ニ、 サン、 シ、 ゴ、 ロク、 シチ、 ハチ。」

ト、 カゾエテ、 ジューハチマデ キタ トキ、 ウシノ タクサン ノ

ツテ イル クルマガ、 イクツカ トーリマシタ。「オヤ。」ト オモツ、

テ イル アイダニ、ボクワ、クルマノ カズガ ワカラナク ナリマシタ。

ウシノ アトカラ、オーキナ キオ ツンダ クルマヤ、イシオ ツンダ クルマガ、イタツモ イクツモ トーリマシタ。オシマイゴ、ロニ ナルト、ニーサンワ、オーキナ コエオ ダシテ カゾエマシタ。

「シジューロク、シジューシチ、シジューハチ。ミンナデ シジュー！ハチ アツタ。」

ト イーマシタ。

キシヤワ ダンダン チーサク ナツテ、トークノ ホーエ イツ、テ シマイマシタ。

ボクワ、サツキ ミタ ウシノ コトオ カンガエテ、

「ボクモ キシヤニ ノリタイナー！」

ト オモイマシタ。

### 綴り方指導要項

#### 指導の發展段階

- 第一期 兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。
- 第二期 兒童の見聞する事象、日常の行動などに就き、見方、考へ方を指導して生活を豊富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。
- 第三期 文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多様ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。
- 第四期 第三期に準じてこれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豊かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

## 初等科第一學年

## 一指 導 要 項

## 言語發表の指導

○兒童の日常使用する言語による發表を盛ならしめる。

- (イ) 日常の生活に於ける獨り言、挨拶、會話など、素朴なことばを取りあげ、それを手がかりとして自由に發表する態度を養ふ。
- (ロ) 言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、氣長に適當な方法を講じ、興味と自信を持たせて積極的に語るやうにする。
- (ハ) 方言、訛語、語法上の誤などは、順次これを矯正して正しい國語が使へるやうに導く。これも指導上氣長な辛抱が必要である。
- 日常生活の中から、何を發表するか、それを發見し把握する仕方を懇切に指導する。

(イ) 日常の生活に於いて、見たこと、行つたこと、考へたことなどを發表させる機會を多くする間に、一定の事柄を中心として發表する力を得させる。

(ロ) 話合、野外遊歩、見學などに際し、その場で設問すること、提示した繪畫や實物、兒童の描いた繪などに就いて説明させること、學校、家庭、その他に於ける遊びや學習や、飼育、工作栽培などの經過を話させることによつて、次第にまとまつた發表をさせる。

(ハ) 進んでは、各自の生活を思ひ起させ、記憶をたどつて、雑多な事象の中から感覺的に印象づけられたもの、興味をそそられたもの、感動したことなどを捉へる練習をさせる。

これが練習にあつては、初めはごく單純素朴なものを取りあげ、次第に複雑豊富なものに向かはせることが大切である。

これは綴り方にはいる最も根本的な方法であるから、十分に基礎づけておかなければならない。

○他教科他科目の指導中でも、言語發表の練習をさせる。

(イ) 少しでも多く言語發表をさせ、生活を反省させ、記憶を喚びさまし、題材を發見し把握する契機を與へる。

(ロ) 言語發表をしようとする兒童は、事柄を時々刻々に思ひ出しながら、ことばにするのであるから、必ずしも整然たる筋を求めることなく、その發表欲を満足させることが大切である。

### 文章表現の指導

○言語表現から文章表現にうつる間に、過渡的な方法として繪畫を描かせる。

(イ) 話す事柄を日常生活の中から、發見し、發表することだけでも、兒童にとつてはかなり程度の高い精神的な作業である。これを文字に移すのは更にむづかしいことである。

この困難な仕事を、躓くことなくさせるために、いろいろ工夫して善導することが大切である。

(ロ) 繪を描かせることは有効な方法の一つである。それは繪を描くこ

とによつて、ただ事物を羅列することから、進んで、物と物、事件と事件との關係や秩序が組立てられるやうになるからである。

更に繪は何枚か續けて描くことにより、時間的な展開を示すことができ、事物の動きを具象化することが會得されるのである。

(ハ) 繪を描かせて、それをことばで説明させたり、或は文字を書き入れさせたりして表現能力を養ひ、次第にこれを綴り方に導く。

○題材をなるべく廣く取るやうに導く。

(イ) 日常の生活に於いて、見たこと、行つたこと、考へたことなどを題材として文章に表現するやうに導く。日常の遊びや仕事や學習や作業などを、そのまま記述することが綴り方であるといふ氣輕な心持で綴り方に向かはせ、生活のあらゆる機會を利用して書く事柄の具體的な指導を行ふ。

(ロ) 文章表現への自發的な興味を喚起するやうに導く。

日記・手紙・詩などのやうな形で記述させることによつて、綴る興味を昂める。

児童相互の綴り方を讀みあひ、又短い文、詩など適當な文例を示し、興味とともに児童の能力を引出す機會を多くする。

(イ) 他教科他科目との緊密な聯關を保ち取材の範圍を廣くする。たとへば理數科に於ける草花や動物などの觀察栽培・飼育等と連絡して生活の興味と表現との自然な結びつきをはかる。

○思ふままに記述をさせ書寫能力を養ふ。

(イ) とりたてて、構想や腹案等の指導を行はず、經驗の順序によつて、自由に記述させる。

(ロ) 用語は児童の生活語から出發し、次第に正しい國語の表現に向かはせる。

綴り方は方言だけで書けるものではない。方言だけで書けといへば、かへつて児童の筆は濫つてしまふ。讀み方、その他の讀物、話し方

その他の言語生活に於いて、正しいことばづかひや正しいひまはしをよく練習させなければならぬ。

誰にもわかるやうにはつきりといひあらはし書きあらはすやうにさせる。そのために、自分の文を度々讀みなほす習慣を養ひ、訂正の仕方を教へる。

(ハ) 表記の基礎的指導を行ひ、書き方と聯關して書寫能力を練る。

カナヅカヒ・句讀點などは讀み方に準ずることを建前として指導する。

書き方と聯關して、文字を正しく書き得るやうにし、且氣輕に鉛筆が持てるやうに練習する。

## 二 指導要項例

### 第一學期



○簡単な話合

- (イ) 挨拶や回答がはつきりいへるやうにする。
- (ロ) 見たこと、したこと、聞いたこと、考へたことなどの話合をさせる。
- (ハ) おもしろい話、をかしい話、珍しい話などを、話合からとりあげるやうにする。

○生活の言語発表

- (イ) 野外遊歩、見學など、その場で問答したり、又見聞したことに就いていはせたりする。
- (ロ) 提示した實物や繪畫、兒童の描いた繪などに就いて、いろいろの発表をさせる。
- (ハ) 遊び、學習、飼育、工作栽培などの經過を発表させる。

○発表をとりあげる

- (イ) 兒童の發表した面白い個性味のある短い話を書きとめておいて、みんなに聞かせてやる。

(ロ) 兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、説明したことなどを、その時の様子と結びつけてみんなに話してやる。

○繪による発表

- (イ) 日常の生活におけるいろいろのことを、繪で發表させる。
- (ロ) 繪日記、紙芝居など、連続した繪話を作らせる。
- (ハ) 短いことばを書き入れ、繪とき、繪入りの文を書かせる。

○發聲及び表記の基礎的練習

- (イ) 話合や言語発表における兒童のことばをとりあげて、發聲の基礎練習をする。
- (ロ) 興味ある短い文を選んで、その視寫、聽寫をさせる。

第一學期

○夏休の繪日記

- (イ) 學級で展覽し、お互の作品をよく見るやうにしむける。

(ロ) 題材のとりへ方のよい作品をほめて、取材の仕方を指導する。

#### ○行動の叙述

- (イ) 自分のしたことを、お話するやうに書かせる。  
 (ロ) うちの人のことや、身のまはりの自然のことにふれて書くやうにする。しひてまとまつた話にさせなくてもよい。

#### ○発表をとりあげる

- (イ) 第一學期に準ずるものをとる。  
 (ロ) とりあげたものを適當な方法によつてよく讀ませ、題材のとりへ方やあらはし方のちがひに注意させる。

#### ○短い文の視寫聽寫

- (イ) 書き方と聯絡して書かせ、特に促音濁音・長音拗音・句點字配りなどに氣をつけさせる。  
 (ロ) 書寫は、まづよいものをほめることによつて、自發的につとめるやう仕向ける。

#### ○郵便ごっこ

- (イ) 役割をきめて郵便ごっこをさせる。  
 (ロ) 生活の實際を通信しあふやうにする。

#### ○紙芝居の製作

- (イ) 繪と文とを使つて、連続した表現をさせる。  
 (ロ) 想像によるもの、自分の行動をあらはすもの、自然をうつすものなどを書かせる。

#### ○冬休の綴り方

- (イ) 戦地の兵隊さんへあてた年賀狀の指導をする。  
 (ロ) 繪日記の書き方を指導する。

### 第三學期

#### ○冬休の繪日記

- (イ) 第二學期夏休後の方法に準ずる。

(ロ) 題材のとらへ方のほかに、あらはし方のよい作品をほめるやうにする。

○遊びを書かせる

(イ) 正月の遊び、かくれんぼなど、遊びのおもしろさを中心にして、自分の行動をくはしく書かせる。

(ロ) 対話を入れること、対話にかぎをつけること、句点を正しくうつことを指導する。

○うちの人

(イ) 親しみの心で、うちの人のことをくはしく書かせる。

(ロ) その人の様子のよくあらはれたところをほめるやうにする。

○手紙の文

(イ) 兵隊さんから来た手紙などを読みあふやうにする。

(ロ) 兵隊さんや病氣の友だちによびかけた文を書かせ、手紙を書く準備をする。

○詩

(イ) 感動したことがらを、短いことばで書かせる。

(ロ) 改行・分節などにはあまりこだはらず、感じたままに表現させるやうにする。

(ハ) 程度にあつたよい作品を鑑賞させる。

○作品の朗讀

(イ) 自分の書いたものをお話のやうに讀むやうに仕向ける。

(ロ) 人の綴り方を喜んで聞くやうに導く。

○自分でなほすことの練習

(イ) 自分の綴り方を何べんも讀みなほすやうにさせる。

(ロ) 書き足りないところを見出して、それを補ふ方法を教へる。

○一年間の綴り方

一年間の綴り方をまとめさせ、それをよく讀みかへして、生活を反省させる。

### 三 参 考 文 題

(次に掲げた文題は指導上の参考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。)

#### 第一學期

四月

オウチノコト

おうちの人、赤ちゃん、おもちゃ、犬、猫、鶏、牛、馬、花などに就いて氣樂に話させる。

ガクカウノコト

はじめて學校へ来た時のこと、みんなとの遊び、先生のこと、教室のことなど。

ツウガクノコト

學校に来る途中で見たり、聞いたこと、誰といつしよに来たか、どんなことをお話したかなど。

テンチャウセツ

式のこと、國旗のこと、先生のお話のことなど。

五月

エンソク

前の晩のこと、その日の朝のこと、途中のこと、お辨當のことなどを順に話させる。

ウンドウクワイ

〔大體「遠足」に準ずる。自分のしたこと、人のしたことなど。〕

オセツク

かしは餅、私のうちの鯉のぼり、學校の鯉のぼりなど。お節供に何をして遊んだかなど。

ハナトコトリ

好きな花、朝顔の芽生え、好きな小鳥、小鳥の鳴き聲などに就いて。その他小動物など。

六月

オテツダヒ

お使ひ、子守、庭はきのお手傳ひ、水くみなどに就いてくはしく話させる。

アソビ

ままごと、かくれんぼ、兵隊ごっこ、なはとび、水遊びなど、その時の様子を誰にもわかるやうに話させる。

アメ

雨でこまつたこと、雨の日のうちで遊んだこと、雨の日の通學など。

ヒカウキ

飛行機を見た時のこと。どんな形をしてゐたか、どんな音がしたかなど、その時の感動をそのままにいひあらはさせる。またおもちゃの飛行機をとばしたことなど。

エホンノハナジ

繪本に書いてあつた繪の話などを中心に。買つてもらつた時、いただいた時のことなどをいつしよに話させてもよい。

七月

タナバタ

うちの七夕祭、學校の七夕祭など。天の川のことなどに觸れて話させる。

ガクゲイクワイノ  
コト

何が一番おもしろかったか。出演したにいさん、ねえさん、お友だちのこと、劇、お話などを思ひ出して話させる。

オボン

うちのおぼん、おぼんにしたこと、お墓参りなどに就いて、經驗を中心に。

ソトデアソ نداコ  
ト

水泳、魚釣り、箱庭づくり、花つみ、蟬とり、線香花火など、行動を中心にして話させる。

オマキリシタコト

神社、お寺にお参りした時のこと。いつ、誰とどんな日に。どんなにしてをがんだかなどをくはしく。

コノゴロノヤサイ

島または庭さきのいんげん、きうり、なすなどに就いて。

第二學期

九月

ナツヤスミノオハ  
ナシ

夏休中の生活を思ひ思ひに話させ、その中のあるものを記述させる。書いた繪を整理して説明を加へさせる。

アラシノ日

あらしの日のうちのこと、庭の草や木のこと、たんぼのこと、通學途中の見聞など。

ムシ

とつた虫、見た虫、虫の鳴き聲など。いなごとり、ばつたとりなど、興味の中に觀察を織り込んで書かせる。

オ月見

お月見の用意、いろいろなそなへもの、お手つたひなど、うちの生活に聯關させて。

ガクカウエン

このごろの學校園に就いて書かせる。繼續觀察をやや加へ日記風に書かせてもよい。

十月

エンソク  
山ノボリ

途中の見聞を書かせる。断片的な短いことばで詩の形になつてもよい。

ウンドウクワイ

時間的に全體を記述させる。或は自分のしたことを中心に書かせてもよい。

オマツリ

お祭の来るまでのこと、前の晩のこと、お参りした時の様子、お祭の御馳走、お小遣のことなど、くはしく。

タンボノヤウス

いねかり、いねこき、おちばひろひなど、自然の様子といつしよに書かせる。

キイタハナシ

友だちとの話、うちの人から聞いたこと、おもしろかつたラジ

ヨンダ本

オの話、讀んだもののあらすちなど、友だちに話すやうに。

十一月

メイヂセツ

式の様子、學校から歸つて遊んだこと、天氣のこと、明治節に就いて聞いたお話、菊の花のことなど。

コノゴロノクダ

柿、栗、りんご、みかん等、栗ひろひ、柿もぎ、みかんとり、いもほりなどに就いて書かせてもよい。

ヘイタイサンニ

特に慰問文の指導としないで、うちの様子、村や町の様子、學校の様子などをお話の形式で書かせる。

エ日キ

自然の觀察を繪日記に書かせる。雲の日記、コスモスの日記、雞の日記など。

エバナシ

讀んだ話を紙芝居風に書かせ、その説明を書かせる。

十二月

冬ノアサ

早起、ラジオ體操などに聯關させて、寒い冬の朝の自然や行動を書かせる。

カヒモノ

おとうさん、おかあさんといつしよに買物をしたこと、自分で物を買つたこと、買物ごつこなどの體驗を書かせる。計算の興味を附隨させて。

シモヤケ

自分のしもやけ、友だちのしもやけなど、手袋や足袋、火鉢などに聯關させて書かせる。

モチツキ

お正月の用意、すすきはき、障子のはりかへ、餅つき、その他楽しいお正月を待つ氣持を行事に聯關させて書かせる。

第三學期

一月

グワンジツノアサ(元日の朝の行事を體驗のままくはしく書かせる。

エ日キ

お正月の三日間、或は五日間の生活の中から、特におもしろかつたことを繪と文で書きあらはす。

オ正月ノアソビ  
シヤシン  
キモノ

たこあげ、はねつき、すごろく、相撲、雪合戦など。  
寫眞をとつた時のこと。家にある寫眞、家庭全部でとつた寫眞などに就いて、くはしく書かせる。説明的になつてもよい。着物、えりまき、外套など、いつ誰に買つてもらつたか、どんなに大切にしているか、どうしてよごしたかなど書かせる。

二月

マメマキ  
キゲンセツノ日  
ユメ  
日ナタボッコ  
學ゲイクワイ

誰が豆まきをしたか、そのときの様子、その夜のこと、うちの人たちの年齢のことなどをくはしく書かせる。  
式のこと、先生のお話のこと、何をして遊んだかなど。  
見たゆめ、ひとのゆめの話、どんなゆめが見たいかなど。  
ひなたぼつこをしてゐる時のいろいろな觀察。實際にひなたぼつこをさせて、詩の形で書かせてもよい。  
學藝會の様子をくはしく書かせる。

三月

オヒナサマ  
オカアサン  
ウグヒス  
二年生ニナル

おひなさま、去年のお節供、お節供の御馳走、お客さまのこと、誰と何をして遊んだかなど。  
地久節、母の日に聯關させて、おかあさんをよろこばせたことや、どういふ時にどういふことをしたら、おかあさんがよろこばれるだらうといふやうなことを書かせる。  
うぐひすの様子や、鳴き聲などに就いて。その他の小鳥のことでもよい。  
二年生になる楽しさ、うれしさを書かせる。「二年生になつたら」といふ氣持を多少感想風に書かせるのもよい。

## 話し方指導要項

## 指導の發展段階

## 第一期

児童と話をするあらゆる機会に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。又人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

## 第二期

児童の見たこと、聞いたことなどに就いて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聽く態度を養ふ。

## 第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

## 第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、又男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。  
なほ、話をしたり聞いたりするときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心がまへを養ふ。

## 初等科第一・二學年

## 指導要項



(一) 話し方は、読み方指導を中心に、これが基本的指導をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 読み方、話し方を一體と考へ、読み方の教材たる挿畫(掛圖)文章等を中心として、話合をさせる。

(2) 話合に於いては、すべての兒童に話す機會を與へることにつとめて、言語發表を盛にし、これを適正に指導する。

特に言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、適當な方法を講じ先づ氣輕に話すやうに仕向ける。

(3) 読み方教材を通じて、正しい發音、ことばづかひになれさせ、教材を朗讀、暗誦すること、言語を身振にあらはすこと、對話を實演することなどにより、正しい話し方に導く。

(二) 話し方は、綴り方指導に於いても、これが積極的指導を行ひ、特に左の事項に留意する。

(1) 綴らうとする主題を中心にして、兒童の見たこと、聞いたこと、考へた

こと等の話合をさせ、言語發表の修練をさせる。

(2) 綴り方を單に書かせるだけでなく、それを朗讀し、また聽くことになれさせ、まとまつた話をしたり、聽いたりする修練をさせる。

(3) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、これを話し方として適正に指導する。

(三) 他教科、他科目の指導と聯關して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身禮法と聯關して、挨拶返事姿勢態度等の躰をなす。

(2) 音樂と聯關して、發音發聲を正すことにつとめる。

(3) 理數科に於ける觀察や作業と聯關して、事物事象とことばとの正しい結合を圖り、正確な言語の使用に導く。

(4) 兒童の圖畫工作に就いて、自分の經驗や思つたことを發表させ、話し方の修練をなす。

(5) お話會、學藝會等に於いて、他教科、他科目の學習、諸行事、童話、讀物等を

話題として、大勢の前で話すことの初歩的指導をなす。

(四) 話し方の指導は、児童の生活のあらゆる機会に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1) 特に初期の話し方指導に於いては、教師は児童の親しい話相手となり、話の誘導者となり、又児童相互の仲介者となつて、すべての児童に氣輕に話す機会を與へることにつとめる。

(2) 教室に於ける問答、話合はもとより、教室外に於けることばづかひに就いても常に留意して、一般的または個人的に指導する。

(3) 教師はつとめて醇正なことばを使用し、特にこの時期では、丁寧なことばづかひをして、児童をして知らず識らずの中に、それに倣はせるやうにする。

(4) レコード・ラジオ等を選択利用して、正しいことばになれさせる。

(5) 家庭と協力して、挨拶その他日常語を正しく使ふやうに躾ける。

昭和十六年九月八日 印刷  
昭和十六年九月十日 發行

(非賣品)

著作権所有

著作  
者兼  
發行  
者

文  
部  
省

印刷者  
大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所  
共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地



